



## 和文論文作りを通して コミュニケーションを考える

その10 「間違い」と「訂正」

呉大学看護学部  
山下 洵子

### ■ はじめに お詫びと訂正

前々号の「交流」、つまり看護学統合研究 Vol.5, No.1 (2003) p.77のなかで間違っただけを書いた。下から10～8行目「もし、江戸幕府が士農工商の下にもうひとつの階層（牛馬の死体を処理しその肉を食べる人たちを卑蔑視した）を置かなかつたら」と、書いたが、これはどうやら間違いらしい。お詫びして訂正しておく。

たまたま、辻本正教著「ケガレ意識と部落差別を考える」<sup>1)</sup>を読んでいて、仰天。氏によると、幕府や藩の法令に士農工商の身分制度はなく、実際の身分は「武士（侍）・百姓・町人」の三つで構成されており、百姓と町人の間には上下の関係がなかった、という。氏は、さらに指摘する。“ある時期にある人たちを突然穢多として、明日から差別してやろうなんて、権力が規制できるわけがないんです。「彼（彼女）は、穢れ多い穢多である」という認識が、俗世間に生きる人々の中であってはじめて、差別が生じ得るのです。何もないところに、無から有を生じさせるかのようにして、穢多・かわたをつくることなど、できっこないのです”、と。

なるほど、納得。

とはいえ、私の認識は世間一般の常識からそれほどずれているということでもなさそう。まわりの人たちにきいてみると、江戸時代には“幕府が敷いた”士農工商の身分制度があって、それが明治政府によつてはずされ四民平等が実現した、と思っている人がほとんど。そして、多くの人が私と同じように、“士が制度として”、農工商の下にさらに穢多・非人の身分を置いて農工商の不満をそらすのに利用した、と理解している。

どうして、私もふくめ多くの方がこのような誤った認識で固まってしまったのか気になるころであるが、これに言及すると、言い訳がましく長くなりそうなので、この点についてはここでおく。

### ■ 間違い

それにしても、「ヒトは間違いを犯す動物」である。

その間違いにもいろいろある。上にあげた私の間違いは、私が今日まで生きてきたなかで、そう思い込むまでの積み重ねがあったということ。別の見方をすれば、無知のせい。お恥ずかしいこと。

これとは別に、同じ恥でも、いわゆるうっかりミスもある。例えば、ワープロの漢字変換。「漢字」と打ったつもりで「感じ」と変換されているのに気付かずにいたりする。あるいは、カーソルを動かしているうちにうっかり必要な部分を消してしまったのに、気がつかなかつたり、などがその具体例。

実は、私は、「看護学統合研究」の別の号でこの類の間違いをしていた。ついでにというには深く頭を垂れなければならないが、ここでそれも訂正させていただく。それは、Vol.5, No.2 (2004), p.84 上から

やました じゅんこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

15～16行目。食物繊維の定義で、ヒトがとり入れてもエネルギー源にならない食物中の多糖類と定義するなら、「セルロースは除外される」とあるのは間違いで、「セルロースは含まれるが、ペクチンは除外される」が正しい。そうでないと、ヒトがとり入れてもエネルギー源にならない食物中の多糖類として、間違った解説になる。

何が理由であれ、こうした間違いをしてはいけぬ。提出原稿にそうは書かなかった、などと言い訳はできない。この雑誌は初校を自分で校正することになっている。多くの方は食物繊維の定義などに不案内である。栄養学の分野の者が栄養学に関わることを語るとき、前に述べた間違いはもちろん、この類の間違いもしないよう特に気をつけるべき。反省しています。

これとは違う類の間違いもある。

それは、意識して密かにやる間違い。改ざんや捏造がそれである。その典型例が、まだ記憶に新しい2000年、旧石器発掘捏造という日本考古学史に汚点を残す事件。

研究の世界では、一番に発表した者だけが評価を受ける。オリンピックとは違い、二番や三番にメダルはない。マスコミの報道とは違い、後追いでもそれなりに評価される、ということはない（追試験としての評価はあるが）。後れをとってもその努力が認められ、敢闘賞がでることもない。まして、「ご苦労さん」の賞状すらない。だから、研究者なら誰でも一番乗りをめざす。そのうえ、壮烈な予算の奪い合いや上司からのプレッシャーもある。もっと速く！ もっと早く！ もっと！ もっと！！

そうした状況に置かれている心境が分からぬではない。しかし、この類の間違いは絶対に許されない。単に名誉欲に目がくらんで、事実を知る場から遠いところにいる人たちをだまそうとする卑怯な行為に他ならない。自分の立場を悪用してのたくらみに、どんな理由の免罪もない。

これとは別に、自分は「正しい」ことをしている、と大声をだして行う間違いもある。それにぴったりの例が、戦争。けしかける戦争には、いつも大義がある。もっともらしいが、しかし、そこには必ず別の真実が隠されている。ここで、広島人に特に身近な原爆慰霊碑に刻まれた「安らかに眠ってください 過ちは繰返しませぬから」を引く。

私は、小学6年のとき、この碑の存在を知った。なんと素晴らしい碑文だろう、短い表現のなかに“もう絶対に戦争をしない”というかたい誓いがこめられている、と子供ながら感銘したのをよく覚えている。被爆の実状を知れば、もう二度と戦争をしてはいけぬ！と、誰でも自然にそう思う。

しかし、そのすぐ後、信頼している大人から、この碑文に問題が起こっていることを聞かされた。「過ちは繰返しませぬから」の主語がはっきりしないから訂正すべきだという話がでている、という。「過ちは繰返させませぬから」とすべきだ、原爆投下は広島人の責任ではない、広島人は単に被害者である、原爆を落とした米国人は悪魔である、過ちとは国土を守れきれないほど弱い国軍であったことだ…など。

なぜ、そんな論議が起こるのだろうか？ 子供の私にはまったく理解できなかった。当時、父や伯母をはじめ私の回りに被爆者がいっぱいいたが、この人たちには責任がない、と思ったことなぞない。戦争をしたのは大人たちであり、日本人皆が参戦したのだ、という理解しかなかった。どんな戦争も悪い。正しい戦争はない。それが、私の小学6年まで生きてきた流れのなかで自然にたどりついた結論であった。

日本は戦争をし、それは原爆投下で終わった、悲惨な戦争であった。それが事実。どんな大義があっても、戦争を起こすのは間違いである。この間違いは訂正がきかない。だから、どんな理由があろうと、二度と繰返してはいけぬ。いまでも、これは広島県人の意識。私たちは、毎年8月6日午前8時15分、自然に湧いてくる感情で黙とうを捧げながらこのことを再確認する。

この共通意識に支えられているからであろうか、広島県人は団結力があるなあ、と感ずることがよくある。「うちらあ、広島県人でしょうが」と、県人同士がすぐに仲間になれる意識である。つい最近もそんな状況のお陰で有り難い体験をした。

## ■ ヒロシマ県人

広島大学医学部第2内科（現：大学院分子内科学）では、1978年から継続して日系米国人の医学検診・調査を行っておられる。実施場所は、ハワイ州 Hilo 市（Hilo の命名は、広島人が移住・開拓したのちに

なむ) およびコナ地区とカリフォルニア州ロサンゼルス市。そうした教室の精力的な、歴史の長い活動のなかから、生活習慣病に関する日米比較など興味ある研究成果がたくさん報告されている。今年は第9次ロサンゼルスでの実施。7月17日から3週間の日程であったが、その終わりの1週間に食事調査のお手伝いで参加させてもらう機会があった。そのときの様子を少しご紹介したい。

場所は、ダウンタウンのLittle Tokyoに近い広島県人会館の2階。入ってすぐの壁に歴代の会長の写真が、そして、突き当たりの壁には歴代の婦人部長の写真が掲げられているちょっと古めかしい感じの部屋。ここで、団長山根公則内科医以下5名の内科医、歯科医2名、看護師2名、管理栄養士2名、助手役の高校生1名の総勢12名、ほかに、現地でお世話になった日系米国人の2名の医師たちが連日精力的に活動された。そして、最終日に近い頃には、河野修興内科学教授や10月から産科婦人科学教授に就任される工藤美樹先生の合流もあった。全日程で15日間の検診があり、総数597名の方が受診されたようだ。

検診は、毎朝6時半から始まった。前日までに予約をした人だけが対象であるが、6時20分頃に会場へ着くと、いつもすでに数名の方がいすに座って待っておられた。会館の外で受付の世話をするのは、県人会のボランティアの男性たち。

女性はといえば、部屋の清掃や検診スタッフに昼食を用意する役。その昼食というのが実に豪華だった。食事調査に関わる立場の私には、特に食事が気になるころであったが、毎日毎日、たくさんの方がとりどりの料理を届けてくださるのに、感謝感激。そして、そのボランティア精神にただただ脱帽。

巻き寿司、ばら寿司(ちらし寿司)、稲荷寿司、おはぎ、よもぎ餅、おにぎり、そうめん、そば、おでん、煮しめ、きんぴらごぼう、煮豆、ひじきの煮付け、卵の花和え、なすの味噌煮、きゅうりとわかめの酢の物、大根おろし、みょうがの漬物、白菜漬、たくあん、奈良漬、福神漬…。品数が多いだけでもうれしかったが、よもぎ、なす、きゅうり、とまと、みょうがなど、ほとんどが自家菜園でのとりたて野菜をつかった手作り、そして、自分の庭での朝もぎいちご、ぶどう、りんご、恐竜の卵(プラムの仲間)、いちじく、みかん。飲み物といえば、朝採りオレンジを搾ったジュースなど。毎日毎日心のこもったもてなしで、2番目、3番目の胃を駆り出しても対応できないほどであった。

お陰で、日本にいるときよりずっとたくさんの品々の和食で日々を過ごした。そうでなくとも、もともと食いしん坊の私、たった1週間の滞在だったというのに、2キロ?太った模様。他の人も、ついつい食指が動いてしまったよう。普段は食事管理に誰よりも厳しい管理栄養士の湯川和子さんや長島芙三子さんから、「関税のかからぬ脂肪の形にして日本に持ち込むことになりそう」と聞いた。この検診に出ることで心が揺れに揺れた(ロサンゼルスに来てから、長男誕生の報があった)中西修平内科医は、私がお会いしたとき「食事がよくて、日本が恋しくない」と、ちょっと曲がった心情を吐いておられた。まるでこれほどの和食の山を初めて見るような目で、吉野宏歯科医は、並んだ皿を毎日丹念に写真に収めて…など、皆さんそれぞれ連日の和食ライフを楽しんでおられた

県人会館の中は、広島以上にヒロシマ。「ほんじゃがのう、そが一なことをゆうても、ここはロスですけん」と二世。「わしゃあ、子供の頃、広島県からどこへも出たことがなかったですけん。それが、初めてよそへ出たのが、ここロスですけん」と一世。「雪隠はあっちですけんゆうて教えたら、『それは何ですか?』ゆうてじゃけん、『厠』ゆうて言い換えたんじゃが、ほいでも分かっちゃあなかったけん。ていねいな言葉を使わんといけんか思おて『ご不浄ですがい』ゆうても通じん。ほいで、『あそこ』ゆうて指さしたら、『ああトイレのことですか』。あんたら、日本におって、日本語をつこうとられんのんですかい?」と新一世(戦後に移民した人を、戦前に移民した人と区別してそう呼ぶのだそうだ)。

日頃24時間NHKの番組になじみ、日本から送られてくる新聞を読み、地元発行の日刊『サン』に目を通して、日本に住む私よりも日本通の人たちのあいだで、広島弁がとびかう。私たちは、場を和ませる気配りにいつも取り囲まれていた。

「あの人は頼母子講の仲間ですけん」には、驚いた。頼母子講、なんと懐かしい言葉、母の口から最後に聞いたのは幾十年前?それが、ここでまだ生きている!未だ無尽講に頼る状況にある人たちが多いからではない。単に、県会のなかでの絆を繋ぐため、ときいた。

機器調整をする休診日、私の母世代の方に、県人会館から車で数10分のところにある敬老館(日本で

いう看護老人保健施設と特別養護老人ホームとが同じ敷地に建っているような施設)に連れて行ってもらった。

「あんたあ、なんのためにここへ来んざったんゆうて、きのお聞きましたじゃろう。そがあなことが目的じゃったら、ここで歳をとったもんが入る敬老館を見なさったらええんじゃあなかろうかのう。そう思おたんじゃが、それがほんまにあんたの役に立つかどうか、自信がのおて…。そがあなことをゆうても迷惑かも知れん思おて…。ゆうべ一晩考えて、今、電話してみよるんよ」と、私たち世代がとうの昔にどこかに置いてきたような心遣いの電話を前日にもらったのであった。

広島に住む広島県人よりもっと広島に拘る人たちがここに集う。それは、この度のような広島大学の検診であったり、頼母子講であったり、カラオケ大会であったり…。目的や動機はさまざまであろうが、ふるさと広島を愛しむ気持ちは皆同じ。ここでのこうした出会いで、これまでどれだけの人たちが励まされ癒されてきたことだろう。ヒロシマ・コミュニティ、南加広島県人会としての強い団結を肌で感じ取った。

国によって生活の違いはあっても、人間として生きていく、命の大切さ、相手を思い合う人間関係は世界共通である<sup>2)</sup>。

この南加県人会は2000年に90周年を祝ったそうで、そのとき、広島県知事の出席もある盛大な式典を行った、ときく。明治の初めに移民した一世から今日のこの繁栄までのとてつもなく長い道のり。それぞれの人に、言葉で言い尽くせないほどたくさんの物語があるに違いない。広島県人会館の近くにある全米日系博物館 (Japanese American National Museum) の展示を見ながら、とりわけ第二次大戦中、日系人が辛いめにあった事実胸がつかえた。それもこれも、一人ひとりがここ米国でそれぞれの命を生きぬいてきたからこそその歴史。

高名な解剖学者、養老孟司先生はおっしゃる。“他人があなたに代わって食事をし、便所に行き、性行為を行ない、心臓が血液を送り、免疫系がガンを防ぎ、要するに「生きてくれる」わけではない。身体は、じつはあなただけのものである<sup>3)</sup>”。

かけがえのない一回きりの一つひとつの命。どの命も等価。一度壊すと、元に戻らない。その事実を皆で大切にしなければ、とあらためて世界平和を願ったロス訪問であった。

## 文 献

- 1) 辻本正教：ケガレ意識と部落差別を考える，解放出版社，pp.64-66，1999
- 2) 平岡豊恵：出逢いに感謝，看護学統合研究5(2)，80-82，2004
- 3) 養老孟司：からだを読む，筑摩書房，p.8，2002